

「罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず」

コリントの信徒への手紙一 15章12～19節

女子聖学院中学校高等学校 チャプレン 木戸 健一

ここには死者の復活のことが記されています。キリスト教信仰にとって、死者の復活とは、それがなければ信仰が成り立たない程に大切なことです。そのことは使徒信条の最後で、「**罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず**」と信仰の告白をしていることからわかります。ところが12節の後半には、この手紙の送り先であるコリントという町にある教会には、死者の復活などはないと言う人たちがいたと記されています。このようなコリントの教会の人たちに手紙を書いたパウロは、13節、14節で次のように記しています。「**死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずで、そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です**」。そして17、18節によれば、イエス・キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの信仰がむなしくなるだけではありません。わたしたちは「**今もなお罪の中にあることに**」なります。「**そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまった**」ことになるのです。それはイエスさまの復活だけではなく、十字架さえも無にすることです。もし復活が無いとすれば、イエスさまが十字架につけられたことで、わたしたちの罪が赦されたことさえ意味がなくなるのです。死とは、神さまの許で安らかに眠りにつくことではなく、すべてが終わってしまうことになってしまいます。聖書では、それを死ではなく、滅びと言います。滅びとは、死によってすべてが無くなってしまいます。ですから19節にあるように、死者の復活を信じないで、「**この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者**」となってしまうのです。

キリスト教信仰とは、生きている間だけのことではありません。生きている間、神さまに見守られているというだけならば、死の先に滅びしかないとするならば、わたしたちは、「**すべての人の中で最も惨めな者**」となってしまうと言うのです。聖書は、死とはわたしたちが神さまから離れてしまったこと、つまり罪によってもたらされたことと記しています。この罪のすべてを、イエスさまがご自分の身に引き受けてくださり、十字架についてくださいました。イエスさまの十字架の死によって、わたしたちの罪は赦され、からだのよみがえり、永遠の命に至る道が開かれたのです。それは、からだは滅んでしまっても、魂は永遠に残るというようなことではありません。一度は滅んでしまったからだのよみがえりというのです。このように死者の復活とは、わたしたちの常識では、とても計り知ることのできないものなのです。

先週の土曜日、11月9日に日本キリスト教団銀座教会で、「東京-祈りの輪」という会が開かれました。2011年3月11日に起こった、東日本大震災から昨日で4年8ヶ月を迎えました。この会は、震災以降半年に1回行われてきた会で、今回で9回目となります。東京にあるキリスト教学校が、東日本大震災のことを覚えて、共に礼拝を守り、共に祈ろうという会です。今回は10校から生徒会の役員を中心に30人の生徒が集まり、それぞれの学校が東日本大震災を覚えて行っている活動を報告し合いました。そして震災のことを、被災された方たちのことを忘れないために、自分たちがどんな活動

を行っていただけるのかを真剣に話し合いました。その中で特に印象的であったのが、宮城県仙台市にある女子のキリスト教学校である宮城学院から来てくださった、お二人の高校1年生の方のお話でした。お二人は、その時被災地に住んでいなければ分からない体験を話してくださいました。避難所に行っ
てはみたものの、人が一杯で、仕方なく自宅のマンションに戻り、停電のために暗く、何の情報も入ら
ない不安な夜を過ごされたこと。マンションの12階にある自宅の給湯器が壊れ、入り口が水浸しにな
り、1週間お風呂に入れなかったことなどを話してくださいました。その一方で、仙台市の中心部に住
む自分たちは、津波にも会わず、地盤も良かったため、しばらくすると震災前と同じような生活に戻る
ことができたが、震災によってまったく生活が変わってしまった人たちに、何か後ろめたいような思いを
持っていると話してくださいました。そのお話からは、震災を体験し、自分も心に傷を抱えながらも、
自分も被災したとは言うことのできないという複雑な思いが伝わって来ました。もしかすると、そのよ
うな思いは、東京とその近くに住んでいるわたしたちにも、共通するものであるかもしれません。しかも震
災によって家や財産、何よりも家族や友人など親しい人を失った方が、自分たちのすぐ側に住んでお
られるのですから、その思いは、わたしたちよりもずっと深いことでしょう。

わたし自身、仙台市の出身で震災の10日後にそこに住む両親の許に行った者として、そのような
思いと向き合ってきました。そして震災で親しい人を失った方を、さらには震災によって亡くなった方
のことを、どのようにして忘れないで、覚えていることができるのかを考えてきました。その時に、わたし
を支え導いてくれるのが、先程、拝読しました聖書の御言葉に代表される聖書のメッセージです。死
者の復活という、わたしたちの常識を遥かに超えた聖書のメッセージなのです。

お祈ります。

父、子、聖霊なる神さま。この朝も、礼拝の時を与えられ、感謝いたします。神さまが、わたしたちを
死ですべてが終わってしまう滅びから、死では終わらない永遠の命に至る道を切り開いてくださったこ
とを感謝いたします。東日本大震災から4年8ヶ月を迎えました。神さま、どうぞわたしたちを、震災の
ことを、被災され方たちを、亡くなった方たちを忘れずにいることができるようにしてください。わたした
ちに、成すべきことを成して行く知恵と力と勇気とお与えください。主イエス・キリストの聖名によっ
てお祈りいたします。 アーメン

2015年11月12日 女子聖学院中学校 チャペル礼拝